特別会員寄稿

ところざわ　街路をおおふ濃緑の　戦後に積みし歳月を問ふ

元NHKプロデューサー　栗田　博行

掲題の一首は、所沢の地を歌ってなかなかの名吟。八荒と名乗る作者はこの一首が浮かんだ時、冥界から正岡子規が「いいねっ！」というのが聞こえたと言い張ります。ところが、昨年所沢市とNHK学園の共催で開かれた「所沢市武蔵野短歌大会」の当日詠部門では、一首は見事選外でした。ですからこの一首の存在を知るのは、作者以外にはありえません。作者は誰あろう、私（栗田博行＝八荒）自身です。今回「人間・夏目漱石～ 北海道送籍がその生涯にもたらしたもの ～」の開講劈頭、この作を披露したところ、受講者の皆さん「秀吟！！」と大きな拍手で承認してくれました。おかげで、晴れ晴れとした気持ちで講座を始める事ができたのでした。

前回「人間・正岡子規」をお話させていただいたとき、「落ち着いて老いさびたクニ・所沢」という講師感想文を当欄に書かせていただきました。日本じゅうがこのようなマチで埋められた時、司馬遼太郎さんのいう「落ち着いて老いさびたクニ」が実現するのではないか、とその文を結びました。受講者の方々のリアクションの的確さ、受け取りの深さの印象から、「成熟都市・所沢」を実感したからです。

今回「人間・夏目漱石」を話し終えて、この実感をさらに強くしました。例えば最終回で、漱石が自身の北海道送籍による兵役回避について、「小学生の息子の先生が、あなたのお父さんは、ホカでお国のためになってるからイイのです。でも、ホカの人がそういう事をしたら諌めてあげなさい、と言ったそうだ」との、苦衷の弁明ともとれる談話内容を紹介した時の、受講者の反応がそれです。それまでの重く深刻な話の流れにもかかわらず、「クスクス」という微苦笑のリアクションが起こったのです。漱石の兵役回避の「卑怯者！」と痛罵もしにくく、かといって「よくやったね…」と肩をたたいてあげるわけにもいかない微妙さを、微苦笑で受け止めるオトナの理解を感じたものでした。

今回さらに気づいたことがあります。前回の経験から「ところざわ倶楽部」の名の元に行われているプログラムの数と多種多彩さは知ってはいましたが、一つのプログラムが企画され、準備を重ねて実行に至り、結果が報告されるまでの手順と作業量の多さと大変さは、経てきた商売柄充分に分かっていました。だからそれは当たり前のことと思ってきたのでした。自分の現役経験や、世に盛興しているカルチャーセンター等と一視同仁していたわけです。ところが、この膨大な生涯学習の事務局働きが、市民のボランティア活動で支えられていたのだった…ということに今回はハタと思い当たったのです。「成熟都市・所沢」の基盤に触れた思いがしました。

こんなことがありました。講座をお引きうけして事務局のＳさんと打ち合わせを始めた頃、受講希望者が160人近くに達したことを伺いました。「へえ！」と嬉しく思っただけの講師・私でありましたが、Ｓさんには困ったという口ぶりが感じられました。教室のキャパシティーは80人で、半数近くの人を抽選でふるい落とさないといけないからです。シーズンを分けて2回実施ということを打診され、そういう発想があるかと感心しましたが、1週に2回講義となると、次の準備のための1日が喰われてしまいます。今度はこちらが困りました。しかし閃くことがあり、「ジャいっそ午前・午後一日2講義で…」と言いかけると、Ｓさん飛びつくように賛成され、役員会にかけるとのことでした。

そうして午前2時間・午後2時間、活動弁士並みにしゃべり続ける私の講義が始まりました。後期高齢者のわが身ながら、気が張ればなんとかなる筈との自負はありましたが、驚いたのは、何とＳさんが講義開始直前、栄養ドリンク剤を差し入れてくれたことです。そうかと思うと別の回には、事務局のＭさんが昼食時に、乙女が喜びそうなサクランボをこの老人に届けてくれました。毎回のようにパソコントラブルに見舞われ、冷や汗の連続だったのですが、その都度ＩＴに通じたＴさんが的確に解決してくれました。老講師は、生涯学習世代というべき年齢のボランティア事務局の親切を受け続け、これが成熟社会のホスピタリティというものか…との感を深くしました。

あの秀吟「**ところざわ　街路をおおふ濃緑の　戦後に積みし歳月を問ふ**」が、一段と深い陰影を帯びて浮かんできたのでした。